

「香散見草」第50号記念号に寄せて

学 長 塩 崎 均

平成24年4月の学長就任以来、「香散見草」を拝読させて戴くことと11月の貴重な書籍の展示を楽しみにしているのは小生だけではないと思う。歴史的な希少図書や貴重物品は大学にとっての大きな財産であるとともに重大な役割でもある。

編集工学研究所 所長の松岡正剛氏に監修を頂いたアカデミックシアターはどの学部にも属さないものであり、全ての学生、教職員のためのスペースである。アカデミックシアターの完成に伴い新たな図書スペースの開設が話題となっている。マンガを含む近大インデックスによる本の配列など新たな試みがなされている。この試みが、学生の図書（書籍）離れを食い止める一助となり得るのか、しばらく経過を見なければならぬ。いずれにせよ、24時間開放の自習室の運用など、新たな試みを続けていくことは近畿大学にとって発展のための必須事項である。

何より重要な事柄のようにグローバル化が叫ばれ、英語なしでは世界に通用しないと思われる感がある。グローバルな人材とは如何なる人間か、一度考えてみたい。科学、技術、通信などの著しい進歩は止めることはできないであろう。人工知能はどこまで発達するのであろうか。それを利用する人間はどうであらうか。考えるだけでも怖くなる。いっそ何も考えないでいようか。それも不安である。われわれ人間がもっと賢くなれば、問題は解決するのであるか。全ての人間が倫理観を持ち、人工知能を理解、利用できるであらうか。それも無理である。いっそのこと、人間としての倫理観を、人工知能を理解、利用できる人工知能を作れば良い。つまらぬ考えを繰り



返している。

本学の建学の精神は未来志向の「実学教育」「人格の陶冶」である。世耕弘一先生が述べられていることこそグローバル人材である。如何に英語が素晴らしくできても、一人の人間として「人に愛され、信頼され、尊敬される」人間でなければグローバル人材ではない。一人の人間が経験できることには限界がある。この限界を乗り越えるためには多くの先人の知恵と教えを学ばなければならない。そのためにも、読書が必須である。図書、図書館の役割がそこにある。

新たな知識、知恵を得るために、一人でも多くのひとに図書に親しんでいただきたい。其の、機会が待っています。